

山は鳴り 地は叫ぶ

23日「まさに生き地獄」 25日「体力、気力徐々に…」 27日「心まで疲れ」

■二十三日 午後八時前後、大地震第一波。以後ずっと続く。着の身着のまま、避難がやっと。強烈なタテゆれ。「山は鳴り、地は叫ぶ」か。新潟地震の比ではない。家中、物という物がふっ飛ばす。瀬戸物、ガラス類はすべてくだけ散り、テレビ、レンジ、釜すべて散乱。この世の終わりのか。生き地獄とはまさにこのこと。外に飛び出ても地割れ、隆起、陥没。暗いので動けない。

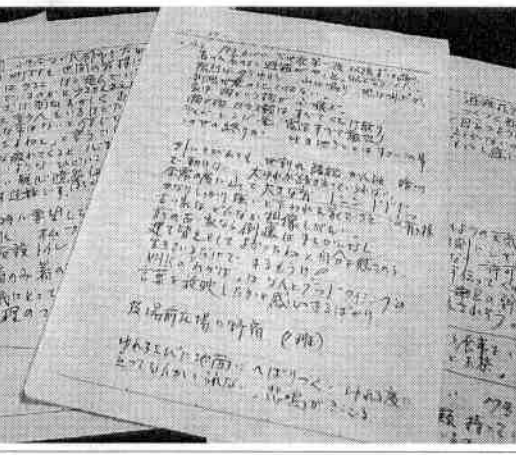
■二十四日 不安ばかり続く。交通網すべてマヒ。救援もなかなか来ない。右往左往するばかり。家に帰り、物を持ち出す。しかし恐怖で長居ができない。家に入るとまたゆれる。

■二十五日 この先どうなるのだろう。体力、気力共に徐々にうせかけていきそう。避難はそれぞれ所帯を持ってつくづく思う。自転車、バイクが目立つようになってきた。車では山は越えられぬ。足がたより

■二十六日 雨模様。天気。家にはもう行けない。国道17号に車を置く。自分でコツコツとそろえた着物もみんなパー。夜は、おいの車の中。大きな余震もたまある。

■二十七日 とうる。おさまらない。道路のキレツが増えている。お寺も天理教会もみんな傾き、玄関はくずれ落ちている。今日は家にいくまい。でも行きたくない。でも怖い。消防車、救急車ひっきりなし。でも、もうみんなにも感じなく、なれてしまっている。車の給油無料。これでしばらく。でも節約して寒さはガマン。家が崩れないで残って、このまま崩落が落ちていくれないか。

車での避難生活を日記につづる、松崎千鶴さん



発生1週間 車中生活女性日記に心情つづる (渡部一実)

新潟県中越地震の発生から二十九日で一週間。いまだに震度5クラスの強い余震が続く川口町では、ほぼ全町民にあたる千五百三十世帯、五千六百九十二人がテントや自動車避難生活を送っている。国道17号沿いに駐車した乗用車で寝泊まりする同町川口の無職、松崎千鶴さん(五五)は地震発生直後から毎日、余震の不安で眠れぬ中、狭い車内で不安な思いを一冊のノートにつづっている。

各地の住民 続く不自由 「この生活いつまで…」

■二十九日 朝がきた。何が起ころうか。何のために飛んでいるのかとささくささく考える。みんな疲れ切っている。心まで疲れて、考えなくともよいようなひどいことまで考えるようになった。お互いの疑心暗鬼。お互いの疑心暗鬼。お互いの疑心暗鬼。

市町村	人口	避難所	避難者数
県内総計		37市町村	547カ所、84063人
越路町	14000人	10カ所	2208人
小千谷市	41600人	120カ所	28687人
小国町	7400人	7カ所	1243人
川西町	8200人	5カ所	243人
十日町市	43000人	77カ所	8272人
見附市	人口43500人	22カ所	2178人
長岡市	193000人	112カ所	28894人
山古志村	2200人		ほぼ全員が長岡市へ避難
川口町	5700人	69カ所	5692人
堀之内町	9600人	4カ所	1100人

(新潟県まとめ)

初日からヘリは飛んでいない。道路のキレツが増えている。お寺も天理教会もみんな傾き、玄関はくずれ落ちている。今日は家にいくまい。でも行きたくない。でも怖い。消防車、救急車ひっきりなし。でも、もうみんなにも感じなく、なれてしまっている。車の給油無料。これでしばらく。でも節約して寒さはガマン。家が崩れないで残って、このまま崩落が落ちていくれないか。

一部地域をのぞき電気が、水道などのライフラインが遮断されている川口町。町役場前の駐車場で百人以上の住民らが、たき火を囲みながら生活。屋内避難所として設けられた町生涯学習センター。朝がきた。何が起ころうか。何のために飛んでいるのかとささくささく考える。みんな疲れ切っている。心まで疲れて、考えなくともよいようなひどいことまで考えるようになった。お互いの疑心暗鬼。お互いの疑心暗鬼。お互いの疑心暗鬼。

名 銀座長州屋
日本力販売 買い受け 通販 10月1日発行
購読申込先 東京都中央区銀座五丁目三十一番地 長州屋S係
03(5541)8371